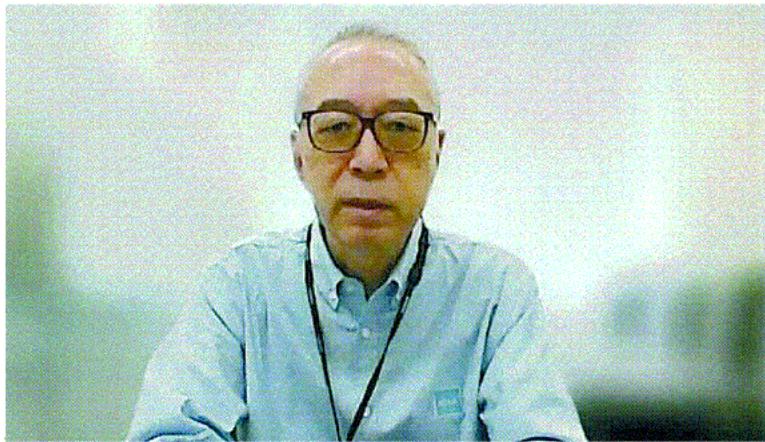


理事・事務局長 加藤 正明氏



かとう・まさあき 1956年大阪府生まれ。神戸大専門職大学院修了。博報堂で地域ブランディングなどを担当。退職後、2016年からNPO「日本の祭りネットワーク」に参加。東日本国際大客員教授。著書に「祭りのイノベーション」(自費出版)

ルポ人口減少
祈りをつなぐ

インタビュー

祭りは無形変化が必要

人口減少や高齢化と軌を
にして、祭りの維持は難
しくなっている。地域にど
う向き合うべきか。地
域社会と祭りの関係につい
て、全国の事例を研究して

を果たしているのか、今後
どう向き合うべきか。地
域社会と祭りの関係につい
て、全国の事例を研究して

若者の声反映し継承を

いる「NPO日本の祭りネットワーク」(大阪市)理事・事務局長の加藤正明氏(66)に聞いた。

「現代社会で祭りにはどのような役割があるので

ようか。

「雨や台風など自然によ

つて収穫量が左右されるど

う苦労から農耕社会だっ

た時代には、神様に祈りを

ささげることで五穀豊穣

を願っていた。そうした祭

りの意味合いは1次産業に

関わる人が減った今でも変わることはない。さらに現代においては、祭りを通じた住民同士の絆の醸成や地域にぎわい創出、地域振興といった面も意識されるようになつた」

「祭りがあることで、普段は離れて暮らす人々が窓会的に集まり、互いの近況を把握することができます。運営への参加を通じて人間形成がなされ、地域へ

の愛着が生まれることにもつながる。また、みこしない。祭りを名目に集まる「神賑わい」の部分が観光資源化されれば、経済効果も生まれる。欲を言えば、一次世代を担う若者の祭り離れも課題です。

「関西学院大で祭りと地域に関わる『関係人口』の創出につながるよう工夫を凝らすことが、より地域振興につながる」

「祭りがなくなることはない学生の多くは、祭りに興味はない」という否

うか。

「伝統はそこで暮らす人々を守ってきた側面があ

る。コミュニティの輪が崩れるだけでなく、災害時

に共助が成り立ちにくくなるなど祭り以外の部分にも影響が出てくる」

「将来も継続していくためには、若者にいかに祭りに触れてもらえるかが重要となる。そのためには祭りの方が子どもに合わせることも必要だ。どんな祭りなら参加したくなるのか、運

営の垣根を低くして若者の意見も取り入れるべきだ」

「人々がこれからも祭り一心で村民が村に戻り、地域を立て直した。現地の方の『文化がわたしたちを守

つてくれた』という言葉が印象に残っている」

「ただ、深刻な少子高齢化で、祭りの継続が難しい

文化。形が変わって当然だ。何を願い、何に感謝する

か、その原点を忘れずにい

れば、形を保つことなどら

われなくていいのではなく

「そもそも祭りとは無形

文化。形が変わつて当然だ。何を願い、何に感謝する

か、その原点を忘れずにい

れば、形を保つことなどら

われなくていいのではなく

「みこしの運行や神事がいか」